

# 火の用心の事

泉鏡太郎

青空文庫



紅葉先生在世のころ、名古屋に金色夜叉夫人といふ、若い奇麗な夫人があつた。申すまでもなく、最大なる愛讀者で、宮さん、貫一でなければ夜も明けない。

鬘ならではと見ゆるまでに結做したる圓鬘の漆の如きに、珊瑚の六分玉の後挿を點じれば、更に白襟の冷豔、物の類ふべき無く——

とあれば、鬘ならではと見ゆるまで、圓鬘を結なして、六分玉の珊瑚に、冷豔なる白襟の好み。

——貴族鼠の 高縮緬の 五紋なる 単衣を曳きて、帯は海松地に 装束切模の色紙散の七絲……淡紅色紋紹の長襦袢——

とあれば、かくの如く、お出入の松坂屋へあつらへる。金色夜叉中編のお宮は、この姿で、雪見燈籠を小楯に、寒ざきつゝじの茂みに裾を隠して立つのだから——庭に、築山がかりの景色はあるが、燈籠がないからと、故らに据ゑさせて、右の装ひでスリツパで芝生を踏んで、秋空を高く睫毛に澄して、やがて雪見燈籠の笠の上にくづほれた。

「お前たち、名古屋へ行くなら、紹介をして遣らうよ。」

今、兜町に山一商會の杉野喜精氏は、先生の舊知で、その時分は名古屋の  
 愛知銀行の——何うも私は餘り銀行にはゆかりがないから、役づきは何といふのか知  
 らないが、追つてこの金色夜叉夫人が電話口でその人を呼だすのを聞くと、「あゝ、  
 もしく御支配人、……」だから御支配人であつた。——一年先生は名古屋へ遊んで、  
 夫人とは、この杉野氏を通じて、知り合に成んなすつたので。……お前たち。……故柳  
 川春葉と、私とが編輯に携はつて居た、春陽堂の新社説、社會欄の記事  
 として、中京の觀察を書くために、名古屋へ派遣といふのを、主幹だつた宙  
 外さんから承つた時であつた。何しろ、杉野の家で、早午飯に二人で牛肉なべをつゝい  
 て居ると、ふすま越に（お相伴）といふ聲がしたと思ひな。紋着、白えりで盛装  
 した、艶なのが、茶わんとはしを兩手に持つて、目の覚めるやうに顯れて、すぐに一切  
 れはさんだのが、その人さ。和出來の猪八戒と沙悟淨のやうな、變なのが二人、鯨の  
 城下へ轉げ落ちて、門前へ齋に立つたつて、右の度胸だから然までおびえまいよ。  
 紹介をしよう。……（角はま）にも。「角はまは、名古屋通で胸をそらした杉野氏を可  
 笑しがつて、當時、先生が御支配人を戯れにあざけた渾名である。御存じの通り（様）  
 を彼地では（はま）といふ。……

わたしは、先生が名古屋あそびの時の、心得の手帳を持つてゐる。餘白が澤山あるからといつて、一冊下すつたものだが、用意の深い方だから、他見然るべからざるペイチには剪刀が入つてゐる。覺の残つてゐるのに——後で私たちも聞いた唄が記してある。

味は川文、眺め前津の香雪軒よ、

席の廣いは金城館、愉快、おなやの奥座敷、一寸二次會、

河喜樓。

また魚半の中二階。

近頃は、得月などといふのが評判が高いと聞く、が、今もこの唄の趣はあるのであらう。その何家だか知らないが、御支配人がズツと先生を導くと、一つゑぐらうといふ數寄屋がかりの座敷へ、折目だかな女中が、何事ぞ、コーヒー入の角砂糖を捧げて出た。——シユウとあわが立つて、黒いしるの溢れ出るのを匙でかきまはす代ものである。以來、ひこつの名古屋通を、(角はま)と言ふのである。

おなじ手帳に、その時のお料理が記してあるから、一寸御馳走をしたいと思ふ。

(わん。)津島ぶ、隠元、きす、鳥肉。(鉢。)たひさしみ、新菊の葉。

甘だい二切れ。(鉢。)えびしんじよ、銀なん、かぶ、つゆ澤山。土瓶むし松だけ。つけ

もの、かぶ、奈良づけ。かごにて、ぶだう、梨。  
手帳のけいの中ほどに、二の膳出づ、と朱がきがしてある。

その角はま、と夫人とに、紹介状を頂戴して、春葉と二人で出かけた。あの、この紹介状なかりせば……思ひだしても、げつそりと腹が空く。……  
何しろ、中京の殖産工業から、名所、名物、花柳界一般、芝居、寄席、興行ものの状態視察。あひなるべくは多治見へのして、陶器製造の模様までで、滞在少くとも一週間の旅費として、一人前二十五兩、注におよばず、切もちたつた一切つゝ。——むかしから、落人は七騎と相場は極つたが、これは大國へ討手である。五十萬石と戦ふに、切もち一つは情ない。が、討死の覺悟もせず、血氣に任せ、馳向つた。

日露戦争のすぐ以前とは言ひながら、一圓づゝに算へても、紙幣の人数五十枚で、金の鯨に拮抗する、勇氣のほどはすさまじい。時は二月なりけるが、剩さへ出陣に際して、陣羽織も、よろひもない。有るには有るが預けてある。勢ひ兵を分たねば成らない。暮から人質に入つてゐる外套と羽織を救ひだすのに、手もなく八九枚討

取られた。黄がかつた紬の羽織に、銘仙の茶じまを着たのと、石持の黒羽織に、まがひ琉球のかすりを着たのが、しよぼく雨の降る中を、夜汽車で立つた。

日の短い頃だから、翌日旅館へ着いて、支度をする時、もうそちこち薄暗い。

東京で言へば淺草のやうな所だと、豫て聞いて居た大須の觀音へ詣でて、表

門から歸ればいいのを、風俗を視察のためだ、と裏へまはつたのが過失で……大

福餅の、焼いたのを頬張つて、婆さんに澁茶をくんでもらひながら「やあ、この大き

な鐸をがらんくと驅けて行くのは、號外ではなささうだが、何だい。」婆さんが

「あれは、ナアモ、藝妓衆の線香の知らせでナアモ。」そろく風俗を視察におよ

んで、何も任務だからと、何樓かの前で、かけ合つて、値切つて、引つけへ通つて酒に成

ると、階子の中くらゐのお上り二人、さつぱり持てない。第一女どもが寄着かない。お

てうしが一二本、遠見の傍示ぐひの如く押立つて、廣間はガランとして野の如し。まつ

赤になつた柳川が、黄なるお羽織……これが可笑い。京傳の志羅川夜船に、素見

山の手の（きふう）と稱へて、息子も何ぞうたはつせえ、と犬のくそをまたいで先へ立

つ男がある。——（きふう）は名だ。けだし色の象徴ではないのだが、春葉の羽

織は何ういふものか、不斷から、件の素見山の手の風があつた。——そいつをパツと脱

いで、角力すまふを取らうと言いふ。僕は角力すまふは嫌きらひだ、といふと、……小さな聲こゑで、「示威運動じゐうんどうだから、式かたばかりで行ゆくんだ。」よし來きた、と立たつと、「成なりたけ向むかうからはずみをつけ、驅かけて來きてポンと打ぶつかりたまへ、可いいか。」すとんと、呼吸こきふで、手てもなく投なげられる。可いいか。よし來きた。どん、すとんと、身み上あがりも身みも輕かるい。けれども家鳴震動やなりしんどうする。遣やりて、仲居なかゐも、女をんなどもも驅かけつけたが、あきれて廊下らうかに立たつばかり、話はなしに聞きいた芝天狗しばてんぐと、河太郎かはたらうが、紫川むらさきがはから化ばけて來きたやうに見みえたらう。恐怖おそれをなして遠卷とほまきに卷まいてゐる。投なげる方も、投なげられる方も、へとくになつてすわつたが、酔よつた上の騷劇さうげきで、目めがくらんで、もう別嬪べつびんの顔かほも見みえない。財産家ざいせんかの角力すまふは引ひきついで取とるものだ。又來またくるよ、とふられさうな先さきを見越みこして、勘定かんちやうをすまして、潔いさぎよく退りぞいた。が、旅宿りよしゆくへ歸かへつて、雙方さうほう顔かほを見合みあはせて、ためいきをホツと吐ついた。——今夜一夜こんやいちやの籠城ろうじやうにも、剩あますところの兵糧ひやうらうでは覺束おぼつかない。角力すまふなど取とらねば可よかつた。夜半よなかに腹はらの空すいた事ことだいふく。大福だいふくもちより、きしめんにすれば可よかつたものを、と木賃きちんでしらみをひねるやうに、二人ふたりとも財布さいふの底そこをもんで歎たんじた。

この時とき、神通じんづうを顯あらはして、討死うちじにを窮地きうちに救すくつたのが、先生せんせいの紹介状せうかいじやうの威徳ゐとくで、從したがつて、金色夜叉夫人こんじきやしやふじんの情なさけであつた。



翌日は晩とも言はず、午からの御馳走。杉野氏の方も、通勤があるから留主で、同夫人と、夫人同士の御招待で、即ち（二の膳出づ。）である。「あゝ、旨い、が、驚いた、この、鯛の腸は化けて居る。」「よして頂戴、見つともない。それはね、ほら、鯛のけんちんむしといふものよ。」何を隠さう、私はうまれて初めて食べた。春葉はこれより先、ぐち、と甘鯛の區別を知つて、葉門中の食通だから、弱つた顔をしながら、白い差味にわさびを利かして苦笑をして居た。

その時だつてか、あとだつたか、春葉と相ひとしく、まぐろの中脂を、おろしで和へて、醤油を注いで、令夫人のお給仕つきの御飯へのつけて、熱い茶を打つかけて、さくさくく、おかはり、と又退治るのを、「頼もしいわ、私たちの主人にはそれが出来ないの。」と感状に預つた得意さに、頭にのつて、「僕はね、お彼岸のぼたもちでさへお茶づけにするんですぜ。」「まあ、うれしい。……」何うもあきれたものだ。おきれいなのが三人ばかりと、私たち、揃つて、前津の田畝あたりを、冬霧の薄紫にそゞろ歩きして、一寸した茶屋へ憩んだ時だ。「ちらしを。」と、夫人が五もくずしをあつらへた。

つい今しがた牡丹亭とかいふ、廣庭の枯草に霜を敷いた、人氣のない離れ座敷で。——鬢ならではと見ゆるまでに結なしたる圓鬘に、珊瑚の六分玉のうしろざしを点じた、冷艶類ふべきなきと、この名物だと聞く、小きなどこぶしを、青く、銀色よく、色の貝のまゝ重ねた鹽蒸を肴に、相對して、その時は、雛の瞬くか、と顔を見て酔つた。——「今しがた御馳走に成つたばかりです、もう、そんなには。」「いゝから姉さんに任せてお置き。」紅葉先生の、實は媛友なんだから、といつて、女の先生は可笑しい。……たゞ奥さんでは氣にいらす、姉は失禮だ。小母さんも變だ、第一「嬌暎」を發しようし……そこんところが何となく、いつのまにか、むかうが、姉が、姉が、といふから、年紀は私が上なんだが、姉さんも、うちつけがましいから、そこで、「お姉上。」——いや、二十幾年ぶりかで、近頃も逢つたが、夫人は矢張り、年上のやうな心持がするとか言ふ。「第一、二人とも割前が怪しいんです。」とその時いふと、お姉上も若かつた。箱せこかと思ふ、錦の紙入から、定期だか何だか小さく疊んだ愛知の銀行券を絹ハンケチのやうにひらくとふつて、金一千圓也、といふ楷書のところを見せて、「心配しないで、めしあがれ。」ちらしの金主が一圓。この意氣に感じては、こちらも、くわつと氣競はざるを得ない。「ありがたい、

お茶づけだ。」と、いま思ふと汗が出る。……鮪茶漬を嬉しがられた禮心に、このどんぶりへ番茶をかけて搔つ込んだ。味は何うだ、とおつしやるか? いや、話に成らない。人參も、干瓢も、もさくして咽喉へつかへて酸いところへ、上置の鮪の、ぷんと生臭くしがらむ工合は、何とも言へない。漸とどんぶり、それでも我慢に平げて、「うれしい、お見事。」と賞められたが、歸途に路が暗く成つて、溝端へ出るが否や、げつといつて、現實立所に暴露におよんだ。

愛想も盡かさず、こいつを病人あつかひに、邸へ引取つて、柔かい布團に寝かして、寒くはないの、と袖をたくいて、清心丹の錫を白い指でパチリ……に至つては、分に過ぎたお厚情。私はその都度、「先生の威徳廣大、先生の威徳廣大。」と唱へて、金色夜叉の愛讀者に感銘した。

翌年一月、親類見舞に、夫人が上京する。ついでに、茅屋に立寄るといふ音信をうけた。ところで、いま更狼狽したのは、その時の厚意の萬分の一に報ゆるのに手段がなかつたためである。手段がなかつたのではない、花を迎ふるに蝶々がなかつたのである。……何を何う考へたか、いづれ周章でた紛れであらうが、神田の従姉——松本の長の姉を口説いて、實は名古屋ゆきに着てゐた琉球だつて、月賦の約束

で、その従姉の顔で、糺呉服を借りたのさへ返さない……にも拘らず、鯁に對して、錢なしでは、初松魚……とまでも行かないでも、夕河岸の小鯔の顔が立たない、とかうさへ言へば「あいよ。」と言ふ。……少しばかり巾着から引だして、夫人にすゝむべく座布團を一枚こしらへた。……お待遠様。——これから一寸薄どろに成るのである。おごつた、黄じまの郡内である。通例私たちが用ゐるのは、四角で薄くて、ちよぼりとして居て、腰を載せるとその重量で、少し溢んで、膝でぺたんと成るのだが、そんなのではない。疊半疊ばかりなのを、大きく、ふはりとこしらへた。私はその頃牛込の南榎町に住んで居たが、水道町の丸屋から仕立上りを持込んで、御あつらへの疊紙の結び目を解いた時は、四疊半唯一間の二階半分に盛上つて、女中が細い目を圓くした。私などの夜具は、むやみと引張つたり、被つたりだから、胴中の綿が透切れがして寒い、裾を膝へ引包めて、袖へ頭を突込むで、ことゝ蟲の形に成るのに、この女中は、また妙な道樂で、給金をのこらず夜具にかける、敷くのが二枚、上へかけるのが三枚といふ贅澤で、下階の六疊一杯に成つて、はゞかりへ行きかへり足の踏所がない。おまけに、もえ黄の夜具ぶろしきを上被りにかけて、包んで寢た。一つはそれに對する敵愾心も加はつたので。……先づ奮發した。

——所で、夫人を迎へたあとを、そのまゝ押入へ藏つて置いたのが、思ひがけず、遠からず、紅葉先生の料に用立つた。

憶起す。……先生は、讀賣新聞に、寒牡丹を執筆中であつた。横寺町の梅と柳のお宅から三町ばかり隔たつたらう。私の小家は餘寒未だ相去り申さずだつたが——お宅は來客がくびすを接しておびたゞしい。玄關で、私たち友達が留守を使ふばかりにも氣が散るからと、お氣にいりの煎茶茶碗一つ。……これはそのまゝ、いま頂戴に成つて居る。……ふる敷包を御持參で、「机を貸しな。」とお見えに成つた。それ、と二つ三つほこりをたゞいたが、まだ干しも何うもしない、美しい夫人の移り香をそのまゝ、右の座布團をすゝめたのである。敢てうつり香といふ。留南木のかをり、香水の香である。私はうまれて、親どもからも、先生からも、女の肉の臭氣といふことを教へられた覚えがない。従つて未だに知らない。汗と、わきがと、湯無精を除いては、女は——化粧の香料のほか、身だしなみのいゝ女は、臭くはないものとおもつて居る。憚りながら鼻はきく。空腹へ、秋刀魚、焼いもの如きは、第一にきくのである。折角、結構なる體臭をお持合せの御婦人方には、相すまぬ。が……従つ

て、拂はらひもしないで、敷しかせ申まをした。壁かべと障しやうじ子の穴あなだらけな中なかで、先せん生せいは「驚いっきやうを  
きつして、「何なんだい、これは。——田ゐな舎かから、内ない證しやうで嫁よめでもくるのかい。」「へい。」  
「馬うまのくらに敷しくやうだな。」「えへ。」私わたしも弱よわつて、だらしなく頭あたまをかいだ。「茶ちやが  
なかつたら、内うちへ行いつて取とつて來きな。鐵てつ瓶びんをおかけ。」と小こ造ぞうな瀬せ戸と火ひ鉢はちを引ひ寄きせて、  
ぐい、と小こ机つくえに向むかひなすつた。それでも、せんべい布ふ團だんよりは、居ゐ心こころがよかつたらし  
い。……五いつ日つかばかりおいでが續ついた。

暮くれ合あひの土ど間まに下げ駄たが見みえぬ。

「先せん生せいは?……」

通とほりへ買かひ物ものから、歸かへつて聞きくと、女ぢやう中ちゆうが、今いましがたお歸かへりに成なつたといふ。矢や來らいの  
辻つじで行ゆき違ちがつた。……然さうか、と何どうも冴さえ返かへつて恐おそろしく寒さむかつたので、いきなり茶ちやの  
間まの六ろく疊でふへ入はつて、祖そ母ぼが寝ねて居ゐた行あん火くわの裾すそへ入はつて、尻しりまで潜もぐると、祖おばあ母あさんが、  
むく／＼と起おききて、火ひをかき立たててくれたので、ほか／＼いゝ心こころ持もちになつて、ぐつす  
り寝ね込こむだ。「柳やな川がはさんが、柳やな川がはさんがお見みえになりました。」うつとりと目めを覺さま  
と、「雪ゆきだよ、雪ゆきだよ、大おほ雪ゆきに成なつた。この雪ゆきに寝ねて居ゐる奴やつがあるものか。」と、もう  
枕まくら元もとに長ながい顔かほが立たつて居ゐる。上あれ、二にか階かいへと、マツチを手て探さぐりでランプを點つけるのに

馴なれて居ゐるから、いきなり先さきへ立たつて、すぐの階はしご子だん段だんを上あつて、ふすまを開あけると、む  
 ツと打うつ煙けむりに目めのくらむより先さきに、机つくゑの前まへに、眞ま紅つかな毛もう氈せん敷しいたかと、戸とぶくろ袋に、雛ひなの  
 幻まぼろしがあるやうに、夢ゆめ心こ地ちに成なつたのは、一ひとはゞ一いち面めんの火ひであつた。地ぢい獄ごくへ飛とぶやうに  
 辻すべり込こむと、青あをい火ひ鉢ぼちが金きん色いろに光ひかつて、座ざ布ぶ團たん一いち枚まい、ありのまゝに、萌も黄えきを細ほそく覆ふ  
 輪りんにとつて、朱しゆとも、血ちとも、るつぼのたゞれた如ごとくにとろけて、燃もえ抜ぬけた中ちゆう心しんが、  
 薬やげん研ぎんに窪くぼんで、天てん井じやうくうへ崩くづれて、底そこの眞ま黒くろな板いたには、ちらくと火ひの粉こがからんで、  
 ぱちくくと煤すすを焼やく、炎ほのほで舐なめる、と一ひと目め見みた。「大たい變へんだ。」私わたしは夢むちゆう中で、鐵てつ瓶びんを噴ふ  
 火くわ口こうへ打ぶち覆まけた。心こゝろ利きいて、すばやい春しゆん葉えふだから、「水みづだ、水みづだ。」と、もう臺だい  
 所ころで呼よぶのが聞きえて、私わたしが驅かけおりののと、入いれ違ちがひに、狭せまい階はしご子だん段だん一いつ杯ばいの大おほ丸まるま  
 げの肥ふ満とつたのと、どうすれ合あつたか、まげの上うへを飛とびおりにか知しらない。下おりぎまに、お  
 ゝ、一ひと手て桶をけ持もつて女ぢよ中ちゆうが、と思おもふ鼻はなのさきを、丸まる々くとした脚あしが二に本ほん、吹ふきおろす煙けむり  
 の中なかを宙ちゆうへ上あつた。すぐに柳やな川がはが馳はせちが違ちがつた。手てにバケツを提さげながら、「あとは、た  
 らひでも、どんぶりでも、……水みづ瓶がめにまだある。」と、この手てが二にか階かいへ届とどいた、と思おもふ  
 と、下したの座ざ敷しきの六ろく疊でふへ、ざあーと疎まぼちに、すだれを亂みだして、天てん井じから水みづが落おちた。さ  
 いはひに、火ひの粉こでない。私わたしは柳やな川がはを恩おん人じんだと思おもふ——思おもつて居ゐる。もう一ひと歩あし來きや

うが遅いと、最早言を費すにおよぶまい。

敷合せ疊三疊、丁度座布團とともに、その形だけ、ばき／＼の煤になつて、うづたかく重なつた。下も煤だらけ、水びたしの中に畏つて、吹きつける雪風の不安さに、外へ出る勇氣はない。勞を謝するに酒もない。柳川は巻煙草の火もつけずに、ひとりで蕎麥を食るとて歸つた。

女中が、つぶぬれの疊へ手をつけて、「申譯がございませぬ。お寒いので、炭をどつさりお繼ぎ申しあげたものですから、先生様はお歸りがけに、もう一度よく埋けなよ、と確に御注意遊ばしたのでございませぬものを、つい私が疎雑で。……炭が刎ねまして、あのお布團へ。……申譯がございませぬ。」祖母が佛壇の輪を打つて座つた。わたしおなじやうに座つた。「……兄、これからも氣をつけさつしやい、内では昔から年越しの今夜がの。……」忘れて居た、如何にもその夜は節分であつた。私が六つから九つぐらゐの頃だつたと思ふ。遠い山の、田舎の雪の中で、おなじ節分の夜に、三年續けて火の過失をした、心さびしい、もの恐ろしい覺えがある。いつも表一階の炬燵から。……一度は職人の家の節分の忙しさに、私が一人で寢て居て、下がけを踏込んだ。



一度は雪國ゆきくにでする習慣ならはし、濡れた足袋ぬれたたびを、やぐらに干した紐ほの結びめが解けて火に落ちたためである。もう一度は覺えて居ない。いづれも大事だいじに至らなかつたのは勿論もちろんである。が、家中水いへちうみづを打つて、燈ひも氷こほつた。三年目の時の如きは、翌朝よくあさの飯めしも汁しるも凍いてて、軒のきの氷柱つらが痛いたかつた。

番町ばんちやうへ越こして十二三年になる。あの大地震おほちしんの前の年の二月四日の夜は大雪おほゆき

であつた。二百十日もおなじこと、日記にっきを誌しるす方々かた／＼は、一寸日ちよつとひづけを御覽ごらんを願ねがふ、

雨あめも晴はれも、毎年まいねんそんなに日ひをかへないであらうと思おもふ。現げんに今年ことし、この四月しぐわつは、九

日か、十日とをか、二日ふつかつ續つけて大風おほかせであつた。いつか、吉原よしはらの大たい火くわもおなじ日ひであつた。

然しかもまだ誰だれも忘わすれない、朝あさからすさまじい大風おほかせで、花はなは盛りさかだし、私わたしは見付みつけから四谷よつやの

裏うら通とほりをぶらついたが、土つちがうづを巻まいて目めも開あけられない。瓦かはらを粉こにしたやうな眞赤まつか

な砂すな煙けむりに、咽喉のどを詰つまらせて歸かへりがけ、見付みつけの火ひの見櫓みぐらの頂てつべん邊へで、かう、薄うす赤あかい、

おぼろ月夜づきよのうちに、人影ひとかげの入いり亂みだれるやうな光くわうけい景けいを見みたが。——淺草邊あさくさへんへ病びやう

人にんの見舞みまひに、朝あさのうち出でかけた家内かないが、四時頃よじころ、うすぼんやりして、唯ただ今いまと歸かへつた、

見舞みまひに持もつて出でた、病びやう人にんの好すきさうな重ぢゆうづめ詰つめものと、いけ花いけばなが、そのまゝすわつた前まへ

かけの傍そばにある。「おや。」「どうも、何なんだつて大變たいへんな人ひとで、とても内うちへは入れませ

。「はてな、へい?……」いかに見舞客が立込んだつて、まはりまはつて、家へ入れないとは變だ、と思ふと、戸外を吹すさぶ風のまぎれに、かすれ聲を咳して、いく度か話が行違つて漸と分つた。大火事だ! そこへ號外が駈まはる。……それにしても、重詰を中味のまゝ持つて來る事はない、と思つたが、成程、私の家内だつて、面はどうでも、髪を結つた婦が、「めしあがれ。」とその火事場の眞ん中に、重詰に花を添へて突だしたのでは狂人にされるより外はない……といった同じ日の大風に——あゝ、今年は無事でよかつた。……

ところで地震前のその大雪の夜である。晩食に一合で、いゝ心持にこたつて寢込んだ。ふすま一重茶の室で、濱野さんの聲がするので、よく、この雪に、と思ひながら、ひよいと起きて、ふらりと出た。話をするうちに、さくくくと雪を分ける音がして、おん厄拂ひましよな、厄落し。……妹背山の言立てなんぞ、芝居のは嫌ひだから、青ものか、魚の見立てで西の海へさらり、などを聞くと、又さつくと行く。おん厄拂ひましよな、厄落し。……遙に聲が消えると、戸外が宵の口だのに、もう寂寞として、時々、びゆうと風が騒ぐ。何だか、どうも、さつきから部屋へ氣がこもる。玄關境の

ふすまを開けたが、矢張り息がこもる。そのうち、香しいやうな、遠くで……海藻をあぶるやうな香が傳はる。香は可厭ではないが、少しうつたうしい。出窓を開けた。お、降る、壯に白い。まむかうの黒べいも櫻がかぶさつて眞白だ。さつと風で消したけれども、しめた後は又こもつて咽せつぽい。濱野さんも咳して居た。寒餅でも出す氣だつたか、家内が立つて、この時、はじめて、座敷の方のふすまを開けた、……と思ふと、ひし、と疊にくひ込んで、そのくせ飛ぶやうな音を立てて、「水、水……」何と、立つと、もうくとして、八疊は黒い吹雪。

煙の波だ。荒磯の巖の炬燵が眞赤だ。が此時燃抜けては居なかつた。後で見ると、櫓の兩脚からこたつの縁、すき間をふさいだ小布團を二枚黒焦に、下がけの裾を焼いて、上へ抜けて、上がけの三布團の綿を火にして、表が一面に黄色にいぶつた。もう一呼吸で、燃え上るところであつた。臺所から、座敷へ、水も夜具も布團も一所に打ちまけて、こたつは忽ち流れとなつた。が屈強な客が居合せた。女中も働いた。家内も落ついた。私は一人、おれぢやあない、おれぢやあない、と、戸惑ひをして居たが、出しなに、踏込んだに相違ない。この時も、さいはひ何處の窓も戸も閉込んで居たから、きなつ臭いのを通り越して、少々小火の臭のするのが屋根々々の雪を這つて遁げて、近

所へも知れないで、申譯をしないで済んだ。が、寒さは寒し、こたつの穴の水たまりを見て、胸震ひをして、小くなつて畏まつた。夜具を背負はして町内をまはらせられないばかりであつた。あいにく風が強くなつて、家の周囲を吹きまはる雪が、こたつの下へ吹たまつて、パツと赤く成りさうで、一晩おびえて寝られなかつた。——下宿へ歸つた濱野さんも、どうも、おちく寝られない。深夜の雪を分けて、幾度か見舞はう、と思つたほどだつたさうである。

これが節分の晩である。大都會の喧騒と雑音に、その日、その日の紛るゝものは、いつか、魔界の消息を無視し、鬼神の隱約を忘却する。……

五年とは經たぬのに——浮りした。

今年、二月三日、點燈頃、やゝ前に、文藝春秋の事について、……齋藤さんと、菅さんの時々、見えるのが、その日は菅さんであつた。小稿の事である。——その夜九時頃濱野さんが來て、茶の間で話しながら、ふと「いつかのこたつ騒ぎは、丁度節分の今夜でしたね。」といふのを半聞くうちに、私はドキリとした。總毛立つてぞつとした。——前刻、菅さんに逢つた時、私は折しも紅インキで校正をして居たが、組版の一面何行かに、ヴェスビヤス、噴火山の文字があつた。手近な即興詩人

には、明かにエズオと出て居るが、これをそのまゝには用ゐられぬ。いさゝか不確かな所を、丁度可い。教へをうけようと、電氣を點けて、火鉢の上へ、あり合せた白紙をかざして、その紅いインキで、ヴェスビヤス、ブエスビイヤス、ヴェスビイヤス、ヴェスビイヤス、どれが正しいのでせう、と聞きく——彩り記した。

あゝ、火のやうに、ちらくする。

私は二階へ驅上つて、その一枚を密と懐にした。  
冷たい汗が出た。

濱野さんが歸つてから、その一枚を水に浸して、そして佛壇に燈を點じた。謹んで夜を守つたのである

大正十五年四月―五月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「火《ひ》の用心《ようじん》の事《こと》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 火の用心の事

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>